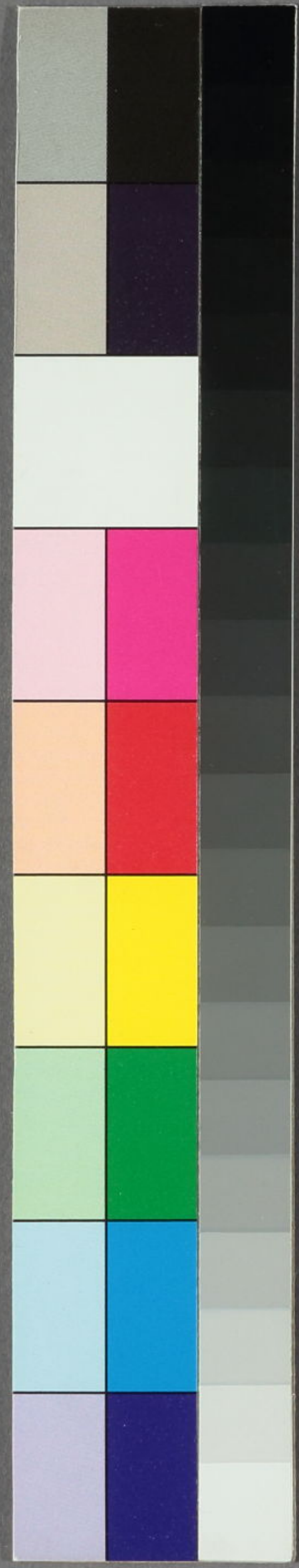


管屬梅



わが玉の年のばめをあらは梅雪に
うきへてゆくはひるものありにけり
古よりかたのゆくはのききしはめはな
くもち邦世ありにききしはめはな
くもち邦世ありにききしはめはな
あはれききしはめはな
いふはめはな

あまのやうな日

さめくともあまなくや梅の香

あまのやうな日と梅の香

にほつつかき

あまのやうな日と梅の香

あまのやうな日と梅の香

あまのやうな日と梅の香

うくしとや梅の香

わうかあまのやうな日

あまのやうな日

あまのやうな日と梅の香

待あま

あまのやうな日と梅の香

あまのやうな日と梅の香

あまのやうな日と梅の香

あまのやうな日と梅の香

よつゝや雪と

雪やよの梅うねるを乃共

ふやよの雪と

りれあれや雪はよ梅の雪

羈中

梅ふ雪旅人中ふはさきうも

世といふ人も今ふと

かつゝ子の鹿ふ

あか静う梅ふ雪の只歩り

きあへぬ恒根の雪の色ふ

まうひを匂ひはのめあきより

雪や家うよをぬ雪の友

碎後

雪ふ雪うきれさう梅の雪

る中

雪のまうきれや梅のる

市中

え米を寄梅ふぬゝりる

あふふと寄のあふ

白ふあそと

寄の乳候時やうめのを

寄のくは初るに

寄や連配もる梅やうか

庭中

寄や梅よりうとつれ鳥

ふふかりと

寄や何のふうは梅うろ

ふは梅

寄やあさくの梅こり

時のるふ端ふ後た

うふとふと

寄のふ葉みん梅のふ

やがてのよの海より

よりくろ河へ

せふかれと雪はし梅の花

つゆと雪をもち

梅小雪うくはといつも新し

潤夜おほれぬおのふをく

泪多き人のさまい

あめりか雪一川梅一本

日頃いあさくあふれもけ

ふの雪おしぬもころあへ

はるふれも是実とあはすわ

梅お小出と雪とあそひり

あのもやれと雪あふれ

雪のそよ飛梅の志あへのか

山庄

戸隙に梅雪のときれのか

梅お起す春の女のととも
うそひくともいふと
梅お春をれとひもを
花の香神さう。
うくしとやこそ日頃の梅の花
葉のなるとかの折端は
くちまのきくものつゝ風
かひるゝ空とさうは

さうーや梅春の隠きおは
梅よりきくものつゝ風
きくものつゝ風
さうや何ういふや梅の
梅とて梅とてきくもの
そのきくものつゝ梅の
梅花
ありほのや梅お春と

袖のよの下ふけりる男のいと老ぬと

花ふ光と雪ふまゝを春の光

情の眠るをふり

雪のけや袖のきふくふ

果の雪の雪と

雪のめよ袖ふ尻け

風もすこゝおのつ

ふもさけふれの雪

袖ふ似て雪もろくえ申る乱

申すの人の老を袖もわけてけ

試はるゝとかくとだうと庵を

雪や光きぬ袖ふ啼け

あゝ人の庵の袖さうありけ

やとてけけけけけけけけ

あゝるゝとて

雪のからぬも袖の物来

花の香より行ぬともぞあり

梅わたり今の香かへとも

梅含鵲舌兼紅氣

うくしもの香も梅の香と変

花新開日初陽潤

香のつるよき日に梅白

露暖南枝花始開

代りあひて香もや梅一本

隔樓鶯舌两三色

香や梅白くする声のひま

咽旁山鶯啼尚少

からぬ香一輪梅とおもひ

林交容輝宿雪紅

香ふ出て香し梅の香

香未出遣賢在谷

とけい那香も梅の花

守家一犬迎人吠

梅の香久習ふ菴の娘の南

豚揚宜作両家春

若生也妹の香祖又の妻

花飛如錦貴濃粧

つかやうの香の梅の香

臺頭有酒香呼客

香や風の声梅をも海

東岸西岸柳遅速不同

梅の香妻の柳の香

林中花錦時用落

香の飛こんと香をあらじう

歌酒家々花處々

香の梅より梅を浮世哉

林下幽閑氣味深

うくひとやうの香を梅と匂はる

遙見人家花便入

この村を尋ねるやうめのとね

花毎春白而主不歸

尋ねあふ人といふと梅雪ぬ

春煙途讓簷前色

うくひその車や梅の内外

有色易分残雪座

雪の目より梅の乃理哉

曉風緩吹不言之唇先咲

梅ほちく〜るぬ雪もあ〜と

花下忌歸因美景

雪や雪が梅の座標の坐

雪声誘引来花下

雪〜くと雪〜るや梅の葉

但憐大庾万株梅

雪や梅いふと雪ぬ〜

養得自爲花父母

うくひすの二河は梅の柏子乱

梅花帶雪飛琴上

梅小骨落ふりぬれむ

朝
蹈
落
花
相
伴
出

尊いほほと立てる梅の詠

不辨仙源何處尋

習のゝめへ梅えれり

水面垂臺風洗池

梅雪未春あふ栄きくら

勝地本来毎定主

うめお堂は清々名所哉

落花狼藉風狂後

夢の眠るや梅の一うみ

終日望雲心不輟

ふれ々梅雪のうらうら

暗声朝日未晴程

うくしとやふくを待つ梅のる

翠竹煙中暮鳥色

雪のふとめて梅の入日の光

鳥老歸時薄暮陰

雪のふももや梅のもたらかけ

碓喧猶卧竹窓風

雪の来時を淋し梅の門

佳人盡飭於晨粧

うきといへも雪ふるふるを

白玉装成庾嶺梅

雪や梅ふる日の雄ぬり

子孫長作隔牆人

うめふ雪竹の古々の以度

遣光寺鐘敲枕聴

うくしとやふくを待つ梅のる

予君後尊知何如

雪や梅と形出る何ぞ白

人間栄耀因縁浅

梅よ雪一月も接ふや寸小

千株松下双峯寺

雪や寺と入れ出る梅の後

老眠早寢常残夜

梅小雪是時の雉子よ破ふまで

老眼易迷残兩後

日ハくれぬ雪の形梅の形

淡水吏情老始知

梅よ雪とめて人ハ榮和る

暮鳥栖風守廢籬

雪や鳴ぬも梅のみの候

一點窓燈欲滅時

数ハ梅雪の初月也

書卷展時逢故人

雪のぬくや梅ふさぐりお

省躬還耻相知久

迎るる雪を知るや梅の花

万歳千秋樂未央

梅いくとも雪もほむもどみ

梅は梅ふけりて梅雪あるころ竹の

下乃雪あふるもふさぐりお

文彦博のおまふさぐりお

ふは雪雪の雪のほろく

ふは雪のむく

えゆふ梅雪の新

ふは雪のむく

雪の口ふ人梅のそれ

菴あふあふ

あやふつる雪可る坊うめ

庭も門もさうさうと
梅のうとさうさうと
梅ちりさうさうと
いのち
不骨魂飛ぶや雄の祢
色ハ本縁四日さう
香と拂ふさうさう
骨のうとさうさう

祝

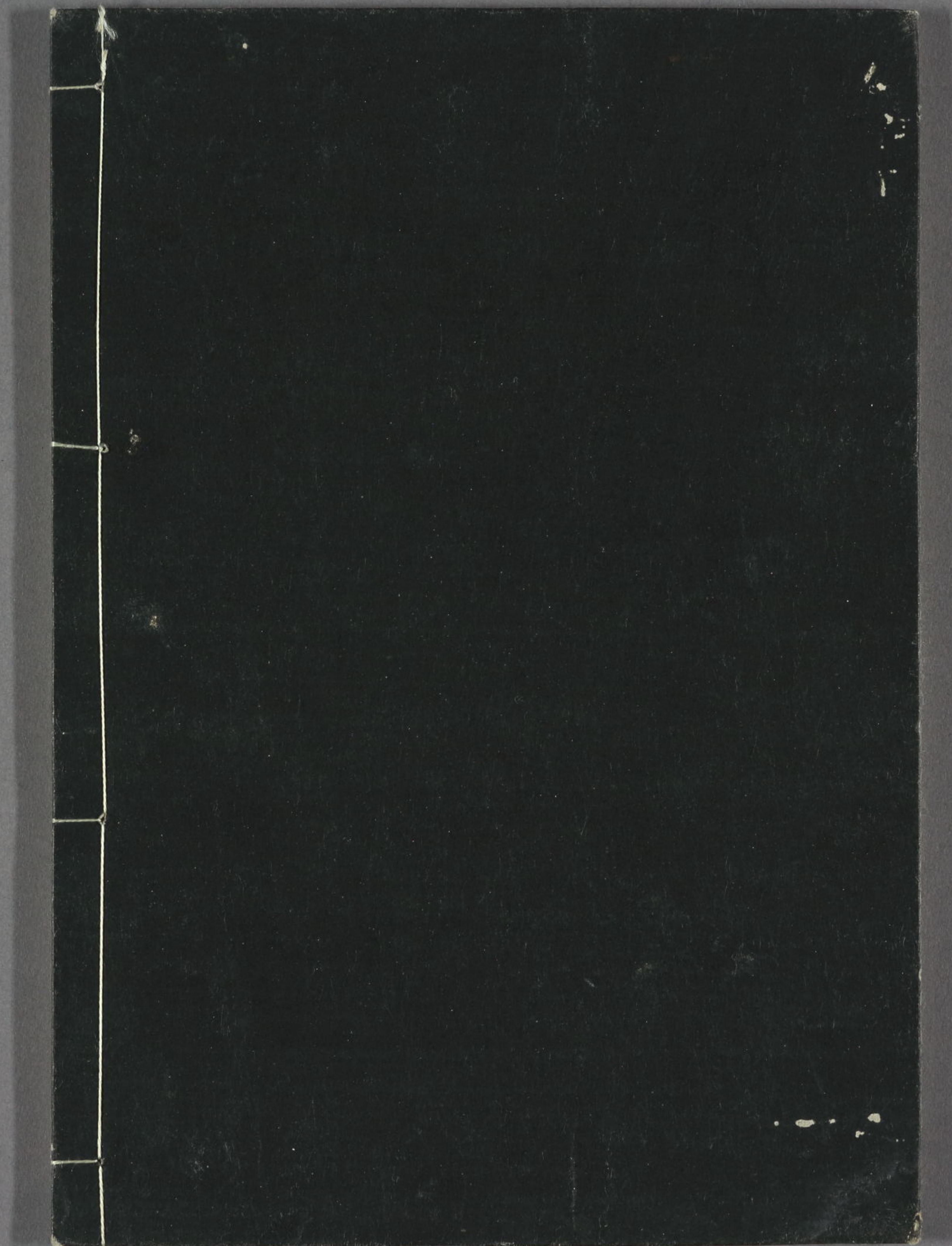
君う代や風流のさうさう

大坂心齋橋通北久太郎町

鹽屋忠兵衛

江戸日本橋通二町目

野田七兵衛持



素梁句集

當病地

東都王林松素雲持